

個別共同研究 歴史民俗資料と デジタルファブリケーションの可能性の研究

期間：2019年～

〔所員〕 関口博巨 昆 政明 角南聡一郎 泉水英計 道用大介

常民研と新しいモノづくり運動の出会い

— 本共同研究の経緯 —

関口 博巨

本研究のはじまり

「歴史民俗資料とデジタルファブリケーションの可能性の研究」は、神奈川大学湘南ひらつかキャンパスの「ファブラボ平塚」（代表：道用大介氏）の協力のもと、2019年度に立ち上げた共同研究であり、歴史民俗資料の現物ないし実測図面からのレプリカ作成、実物資料の3Dデータ化などを、キャンパス内において自前で作成する方法を模索しようとするものである。

2021年度、ファブラボ平塚の機能は、みなとみらいキャンパス1階の「ファブラボみなとみらい」へと移転した。これと軌を一にして、同ラボを運営する道用氏は日本常民文化研究所の所員に就任し、本共同研究は新しい局面を迎えた。

ファブラボとは

FabLab（ファブラボ）とは、デジタルファブリケーション（3Dプリンターやレーザー加工機など、PC制御のデジタル工作機械を活用したモノづくり）を中心とした市民工場の国際的ネットワークのこ



写真1 ファブラボみなとみらい



写真2 疑似古文書用版木の試作品

とである。個人による自由なモノづくりの可能性を拡げ、「自分たちの使うものを、使う人自身がつくる文化」の醸成を目指している。

ファブラボの推奨機材には、レーザーカッター、CNC ルーター、ミリングマシン、ペーパー／ビニールカッター、3D プリンター、各種ハンドツール・電子工作ツールなどがある（FabLab JapanNetwork “What’s FabLab?”. FabLab Japan. <http://fablabjapan.org/whatsfablab/>（閲覧日：2021年8月30日））。



写真3 ファブラボみなどみらいの作業風景（2021年度）

共同研究の経緯

2019年度は、2020年3月に予定されていた古文書修復実習の開催にむけて、古文書を原版とする修理練習用の疑似文書の製作に着手した。ところが、ちょうどそのタイミングで新型コロナウイルス感染症が拡大し、2020年度にいたるまで、本共同研究にかかわる活動は実質的に停止を余儀なくされた。

2019年7月に開催した研究会（7名参加）では、古文書などの文献資料だけでなく、民具資料の研究・活用とデジタルファブリケーションとの協同についても話し合った。民具資料とデジタルファブリケーションは、文献資料よりも、むしろ高い親和性を有していることは明らかである。

2021年度末の2022年3月23日には、日本常民文化研究所第130回研究会と共催で、共同研究の第1回研究会を開催し（オンライン開催）、道用大介氏が「デジタルファブリケーションと物質文化の接点を探る」というテーマで報告した。専門分野を超えて多くの参加者が集まり、活発な議論が行われた。当研究所関係者や国際日本学部歴史民俗学科の学生たちのなかにも、デジタルファブリケーションへの関心が芽生えてきている。

今後の展望

2022年度末、日本常民文化研究所は博物館法第29条の規定に基づき博物館相当施設として指定された。歴史民俗資料とデジタルファブリケーションの可能性の研究は、これからますます重要性を増していくものと思われる。